

【特集：忘却されざる記憶—60年後からみるマラヤ建国】

特集にあたって

篠崎香織

本特集は、マラヤ連邦の独立以降 60 年あまりにわたり公に語られてこなかったマラヤ建国の歴史について、マラヤ共産党 (Malayan Communist Party) を中心にとらえる。マラヤ共産党は 1930 年に設立され、植民地からの解放を掲げて活動を行い、イギリス植民地政府の厳しい取り締まりを受けたが、日本占領期にマラヤ人民抗日軍を組織し、イギリス軍と協力して抗日活動を行った。日本軍が撤退し、イギリスが植民地統治に復帰すると、マラヤ共産党は再びイギリスを相手に植民地からの解放を掲げて活動を展開した。イギリス植民地政府は非常事態を宣言してマラヤ共産党を鎮圧し、マラヤ共産党はタイ南部に逃れタイ国境地域でゲリラ活動を続けた。非常事態はマラヤ連邦が独立した後も継続し、1960 年に終結した。

マレーシア政府とマラヤ共産党は 1989 年に和平協定を結んだ。しかしその後もマラヤ共産党は、公に語られることがはばかられたり、公に語られる時には治安のかく乱者として扱われたりしてきた。マラヤ共産党の指導者チン・ペンはタイからマレーシアへの帰国を望んでいたものの、それが許されることはなく、遺灰でさえも帰国を許されていない。アミール・ムハンマド (Amir Muhammad) 監督の『最後の共産主義者』(The Last Communist、2006 年) やウォン・キューリット (Wong Kew Lit/黄巧力) 監督の『新村』(The New Village/新村、2013 年) などのように、マラヤ共産党の肯定的な側面をとらえる映画はマレーシア国内で上映が許可されてこなかった。これに対して、マラヤ共産党のゲリラと戦う警察の奮闘を描いた 1981 年の作品『ブキット・クボン (Bukit Kepong)』は、2015 年にデジタル版が制作され、劇場で公開された。

2016 年に制作されたラウ・ケクフアット (Lau Kek Huat/廖克癸) 監督によるドキュメンタリー映画『不即不離——マラヤ共産党員だった祖父の思い出』(不即不離/Absent without Leave、台湾、2016 年) は、ラウ監督の自伝的なドキュメンタリーで、マラヤ共産党員であった祖父を中心に自身の家族の歴史をたどるなかで、マラヤ建国の歴史やアジアの現代史において語られてこなかった側面に光を当てた作品である。この作品もマレーシア国内での上映が認められず、インターネット上で期間を限定して公開されたのみだった。しかし 2018 年総選挙後には、小規模ながらマレーシア国内で上映されるようになっており、マラヤ共産党について語りうる言論空間が少しずつ広がってきているを感じ

させる。こうした変化の兆しが見られるなかで本特集は、マラヤ共産党についての歴史の語り直しを中心に、マラヤ建国から60年あまりを経た今日、マレーシアおよびシンガポールでマラヤ建国がどのように語り直されているのかをとらえる。また1940年代から60年代の東南アジアでは、共産党に対する弾圧や排除が進展しており、同様の歴史をもつインドネシアについてもとらえる。

本特集は7本の論文を収めている。冒頭はラウ監督による論文で、『不即不離』を制作・上映した経験から、マラヤ建国の過程で自らの家族にもたらされた亀裂とその修復、個々の記憶から多角的に歴史を記録・記述しうる可能性などを論じ、本特集を貫く問題提起や話題提供を行っている。

村井論文は、『不即不離』のなかで元マラヤ共産党員たちが歌った歌に着目し、元マラヤ共産党員のアイデンティティの変遷と、ラウ監督がそれをどのようにしてマレーシアの歴史の物語の中に位置づけようとしているかを考察する¹。

続く5本の論文²では、1990年代以降、マレーシアおよびシンガポールでは建国期の記憶の掘り起こしがどのように進展しているかを論じる。また共産党に対する弾圧が進展するなかで、その影響を直接・間接に受けて国家を離れ、家族が離散するというマラヤと共通の経験について、インドネシアの事例を論じる。

及川論文は、マレーシア出身で台湾を拠点に活動する作家・研究者で、マレーシア華人の集合的記憶におけるマラヤ共産党の不在をしばしば題材としてきた黄錦樹の著作に着目する。本論文は、文学的な技法を通じて記録や記憶を付き合わせても埋まらない歴史の空洞としてマラヤ共産党を描き、マレーシア政府とマラヤ共産党のどちらか一方に収斂しない独自の視点からマレーシア華人の歴史を問う、マレーシア華人文学者としての黄の試みを分析する。

倉沢論文は、9・30事件後にインドネシア共産党への弾圧が激化する中で、中国とのつながりで共産党支持者とみなされ、インドネシアからの出国を余儀なくされ、中国に渡った華人の記憶をたどる。その記憶から、スハルトのもとでインドネシアが新たに建国される過程で華人が経験した痛みを描く。また中国、香港、インドネシアなどに離散した家族の記憶から、20世紀後半のアジアの政治と国際関係を照射する。

マレーシアにおけるマラヤ建国の記憶の掘り起こしや歴史のとらえ直しは、華人のみが行っているわけではなく、マレー人の間でも活発に行われつつある。このことについて坪

¹ 日本マレーシア学会は2017年度研究大会1日目(2017年10月21日)で、『不即不離』の上映とラウ監督を招いたトークセッションを、混成アジア映画研究会との共催で実施した。また研究大会2日目(2017年10月22日)にシンポジウム「忘却されざる記憶——60年後からみるマラヤ建国」を実施した。ラウ論文はトークセッションとシンポジウムでの報告を、村井論文はトークセッションでの報告を、それぞれ発展させて執筆されたものである。

² これら5本の論文は、シンポジウム「忘却されざる記憶——60年後からみるマラヤ建国」での報告やコメントを発展させて執筆されたものである。

井論文は、1990年代以降の動向を整理するとともに、統一マレー人国民組織（United Malays National Organisation）に代表されるマレー人右派、それと競合したマレー人左派、いずれにも与することなく独自の構想を持った混血系のイスラム知識人という系譜をとらえる。

シンガポールでも1990年代以降、人民行動党（People's Action Party: PAP）と敵対してきた左派の再評価などを中心に、歴史のとらえ直しが活発化している。これに関して松岡論文は、2015年に改訂された中学校の歴史教科書と、2017年2月に改装し開館した戦跡施設「旧フォード工場」における展示を分析し、歴史をとらえ直そうとする試みがPAPによる「正史」にどのような変化をもたらしたのか、あるいはもたらしていないのかを論じる。

渡辺論文は、シンガポールとマレーシアで日本占領期の記憶がそれぞれどのように語られているのかを、歴史教科書と戦没者の追悼活動を通じて考察する。日本軍によるマラヤ統治が華人と非華人との間に記憶の亀裂を生じさせたこと、また1990年代の日本の安全保障政策や日本国内における太平洋戦争のとらえ直しが歴史教育の重視や戦没者の追悼活動の活発化の一背景となっていることなど、マラヤ建国の記憶をめぐるせめぎあいにおいて日本が一つのファクターとなっている可能性を指摘する。

本特集に収められた論文が総じて指摘することは、忘却されたり、周縁化されたり、抹消されたりした存在を包摂するように記憶を掘り起こし、それを特定の言説に拘束されない自分なりの建国の物語に編み直す試みが、文芸活動を通じて活発に行われつつあることである。こうして編み直される建国の物語がどのように相互に作用し、当該社会の再編につながっていくのかという視点は、今後ますます重要になるとと思われる。

（しのぎき・かおり 北九州市立大学）